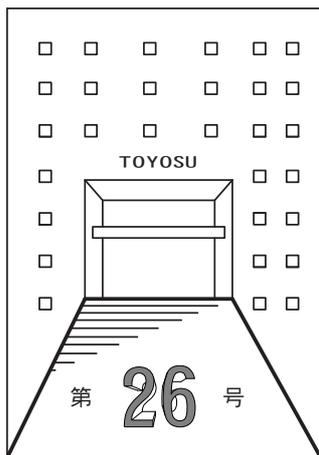


# 建築会

ご寄稿頂いた皆さま

五十嵐久也 鈴木泉  
加藤大祐 江藤健夫 廣谷祐貴  
峰村一彦 赤井高行 永田光弘  
樋口毅 羽場太郎 成田宏之  
岩崎康明 野原修 浅野孝信



芝浦工業大学建築会

〒一三五八五四八  
江東区豊洲三二七-五  
〇三五八五九八四〇〇

<http://sit-arch.com/>

二〇一〇年一月一日 刊行

## 学校法人芝浦工業大学 理事長挨拶 五十嵐久也（一九六四年卒）



今般、小暮前理事長の後を受け、理事長に就任いたしました。五十嵐久也です。

私は一九六四年芝浦工業大学工学部建築学科を卒業し、鹿島、三井住友建設と建設業界一筋に歩んできました。母校である本学では〇二年芝浦工業大学評議員、同年一月校友会副会長・組織委員長。〇三年芝浦工業大学理事。同年九月校友会会長（一〇年六月まで七年間会長職）として微力を尽くして参りました。

さて、芝浦工業大学の源流は、創立者有元史郎先生が、一九二七年（昭和二年）、大森の地（その後、芝区西芝浦に移転）に開設した東京高等工商学校です。一九四九年（昭和二十四年）には学制改革により芝浦工業大学を設置しました。法人の設置校には幾多の変遷があり歴史を刻んで参りましたが、現在は大学（三学部一七学科）、大学院工学研究科（修士課程、博士課程（後期））、専門職大学院に加え、東京都と千葉県に併設中学校高等学校を擁して一万名を超える学生・生徒諸君が学んでいます。

有元先生が建学の理念として掲げたものは、「実用的な技術と知識を併せ持つて工学一途、工業立国技術立国を担う技術者の育成」と「自立自学、質実勤勉しかも高い倫理観と豊かな見識を備えた優れた人間形成」を目指したものでした。その実現の支えとなってきたのが「現代社会の諸相に学び、人類の福祉、社会に貢献する技術者の育成」を旨とする本学の実学教育であり、教職員一丸となり一貫して有為な人材の育成に邁進してきました。

結果、本学の卒業生は堅実に仕事ができる、仕事に強い技術者として高い評価を受け、我が国の技術・工業の発展に大

きく貢献してまいりました。本学は、創立後八三年を超える歴史を歩んできましたが、社会から求められる大学として存在し真価を発揮できなければ未来はありません。

様々な分野でグローバル化、技術の高度化が進む現代社会は本学をどのような理由で求め評価しているのか、今一度整理し、さらなる教育の質向上を目指し全学の求心力を高め新たな挑戦に取り組みます。

「理工系を目指すなら芝浦工大」「学生採用なら芝浦工大」と皆様からご評価いただける大学、自信を持ってお薦めいただけるきらりと光る大学づくりに努力してまいります。

末筆ではございますが、伝統ある芝浦工業大学建築会の益々のご発展と会員様のご多幸ご健勝を心よりお祈り申し上げます。

今後の芝浦工業大学にご注目いただき、ますますのご支援ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

## 建築会会長挨拶 鈴木泉（一九八六年卒）



一二月四日（土） 第一回 建築学科同窓会を開催します  
記念講演会は、「東京スカイツリー」設計余話です！

この度、学校法人芝浦工業大学の理事長に、建築会の会員でもある五十嵐久也先輩が就任されました。五十嵐先輩の理事長就任は建築会にとっても大変な慶事でありますので、本会報においては、前稿の巻頭を飾っていただくこととしました。また、今回号においても、多くの在校生、会員諸氏より貴重な投稿を頂戴しており、この場を借りてお礼申し上げます。



す。

私は、二〇〇八年十一月の建築会総会において、当会の会長職を拝命されましたが、今回号では、建築会の取り組みについてお知らせいたします。

建築会は、建築学科のOB会として昭和四二年に発足し、以来、「会員相互の親睦を図るとともに、建築に関する学術及び技術の進歩に寄与することを目的」として活動しており、毎年発行する建築会報と四年毎に発行する建築会名簿の作成を活動の主軸としています。

建築学科は、一九五四年（昭和二九年）二月一日に認可され、以後、本年の四月に五七期生を新入生として迎えるに至っており、二〇一三年四月には六〇期目の新入生を迎えることとなります。建築会では、学科六〇周年を迎えるに当たり、会員相互の親睦をさらに深めるため、これまで継続してきた、会報と名簿の発行に加え、新たな事業に取り組みます。まずは、会員が集う場として、本年二月四日（土）に、

第一回の同窓会を開催いたしますので、会員諸氏におかれましては、是非ともご参集いただきたくお願い申し上げます。会の内容としては、基調講演として五十嵐理事長をお招きし、「芝浦工業大学の将来的展望」についてお話しいただき、次に、現在、建築界で最も注目すべき話題の「東京スカイツリー」について、設計者の日建設計様のご好意により展示資料をお借りし、「近代タワー建築を見る！」と題したイベントを開催することいたします。

また、記念イベント後に懇親会を開催し、建築学科卒業生の世代を超えた交流の場をご用意いたします。なお、この懇親会は、一八時半に中締めとさせていただきますので、その後、この機会を利用して各学年による同窓会の場として利用していただければ幸いです。

さらに、建築学科六〇年史については、来年の定期総会に、その概要について公開する予定で本年より取り組んでおりますが、この機会に、会員の皆様の忌憚のないご意見を賜りたく、よろしくお願いたします。

それでは、建築会への会員諸氏よりのご指導ご協力をお待ちしておりますので、お気軽に当会が取り組む事業にご参加ください。  
【株式会社 佐藤総合計画】

### 建築耐震工学研究室・上村研究室レポート 廣谷祐貴（大学院 建設工学専攻二年）

上村研究室は、実験や解析等から建築構造の安全について、上村教授の下で研究しております。また、研究から論理的な物事の考え方を学んでおります。今年度の研究を通して、研究室のご紹介をさせていただきます。

毎年、前期は全体の勉強会を週一回行います。勉強会は、上村教授と修士学生が卒論生に、研究を行うまでに必要な内容を伝え自身で考えてもらう事を目的としており、修士の私達も改めて考え方を深めていくことが出来ます。また、勉強会の中で、卒業生の方に研究についての助言を頂く事や、社会でどの様に建築と関わる事になるか等を話し合う事もあり、私達にとって貴重な機会となっております。

勉強会もある程度進みますと、具体的に研究を進めることとなります。今年度は修士学生二名と卒論生二名の実験研究、修士学生二名と卒論生三名の昨年度行われた実験の研究、卒論生一名での既往のデータ整理を行う研究とに分かれました。研究活動が決まった後は、班毎での勉強会や研究活動が主ですが、実験は試験体設計、打設、加力までに多くの労力が必要の為、全体が協力して行います。試験体設計や考察方法の検討等は、他の修士学生が実験経験を活かし協力し、試験体作成時は、他の卒論生が補助を行います。また、過去の実験を研究する卒論生も補助として参加することで、加力方法や歪みデータの測定法等を知り、自身の研究内容の理解に繋がっております。

また、修士の学生は、先の研究活動に加え、対外論文の投稿を行います。対外論文の発表では、学外の方との質疑応答

創意と品質



## だいやす建設株式会社

代表取締役 佐藤勝利  
建築学科 昭和36年卒

〒111-0031 東京都台東区千束1-2-3 TEL03(3874)6247(代表) FAX03(3874)6240  
URL: <http://www.daiyasu-k.co.jp>

## 株式会社 総合建築設計

代表取締役 石井敏明  
建築学科 1965年卒

〒160-0022 東京都新宿区新宿1丁目7番2号  
Tel. 03-3226-7655 Fax. 03-3226-3703  
<http://www.b-info.jp/so-gokenchiku/>  
E-mail : [so-go.kenchiku@nifty.com](mailto:so-go.kenchiku@nifty.com)

や学外の方の発表の拝聴、どのような議論が盛んに行われているのかを知ること、私達の研究の意義を考える機会となります。

現在八月ですが、この様にして、研究室全体が互いに協力し合いながら、研究を進めていきたいと思えます。また、前述の様に、卒業生の方には研究指導や様々な点での協力も盛んに行って頂いており、感謝申し上げます。今後とも、よろしくお願い致します。



実験棟にて集合写真

## 建築空間研究室・毛井研究室レポート 加藤大祐（大学院 建設工学専攻二年）

毛井研究室には現在、四年生四人、院一年生三人、院二年生三人の計一〇人が在籍しています。過去三年間は、一時期の建築ブームの影響で学生の数が多く、四年生が一〇人以上と大所帯だったのですが、今年度は研究室選考の際に手違いもあり、少人数での活動となりました。

各学年の人数が少ないこともあり、ゼミ等は会議室を借りずに研究室で行っています。私が四年生の時は一五人と非常に多く、院生との交流も薄かったのですが、今年度は比較的和気あいあいとしているような気がします。

この原稿を書いている時点で前期日程が終了した段階になります。四年生は設計Vの授業を終え、七月あたりから本格的に卒業設計・論文に取り掛かり始めたところです。去年は人

数も多く、中間発表に向けた合宿を夏期休暇中に組んでいたのですが、今年は直前に一日集まるだけとなっていることが若干心配であり、また残念です。院一年生は、毛井先生の出席による川越の設計課題が終了し、現在はゼミの課題として、夏期休暇を利用して作品分析とコンペ出展に取り組んでいます。院二年生も夏を迎え、各自が修士論文に向けて本格的な活動を開始したところです。

これから後期に向けて、四年生と院二年生は卒業設計・修士論文の完成へ向けてギアを入れ替えていくこととなります。院一年生は、去年は川越課題の展示会を現地で行わせていただけなのですが、今年はスペースの関係でそれができなくなってしまうため、四年生のアドバイザーと各自での活動がメインとなります。去年までと比べコンペに対して積極的な人が多いため、個人的には入賞でもしてくれないかと期待しています。

なお、就職状況ですが、四年生は問題なさそうですが、院二年生は三人のうち内定者が一人と、正直なところあまりよくありません。かくいう私も内定が出ておらず、原稿を書きながら焦っております。

毛井先生に伺ったところ、先生の定年が再来年あたりとのこと、研究室がなくなってしまう年が徐々に近づいてきてしまいました。今年度は在籍者も少ないのですが、これから先、皆で盛り上げていければと思っております。



〇九年度夏合宿

快適な環境づくりに確かな技術で貢献する

# 住友電設株式会社

取締役社長 菅 沼 敬 行

<http://www.sem.co.jp/>



# 日建設計

代表取締役社長 岡本 慶一

<http://www.nikken.co.jp>

東 京 東京都千代田区飯田橋 2-18-3  
Tel. (03)5226-3030  
大 阪 大阪市中央区高麗橋 4-6-2  
Tel. (06)6203-2361  
名古屋 名古屋市中区栄 4-15-32  
Tel. (052)261-6131  
九 州 福岡市中央区天神 1-12-14  
Tel. (092)751-6533



があつた訳でもない私が何故社寺の設計をするようになったのか。

ゼネコンでは工事受注営業の手土産代わりに計画案を作つて顧客に持ち込むことがよくあります。この計画案は設計施工を前提としているのではなく、「営業設計」と称しています。三〇歳を過ぎた頃、たまたま仕事が空いていた私が成田山の営業設計の担当になった、というのがこの道に進むことになった切っ掛けです。しかし後になって考えてみると、当時の上司が和風建築という奥が深く長く取り組めるテーマを与えてくれたのではないかと思っています。

本来木造の社寺建築は棟梁が設計から工事まで全てを取り仕切ります。しかし現代では構造もRC・S造等多様化していることもあり、ゼネコンが組織で棟梁の役割を果たしている側面があります。そんな組織の中で三〇年余り、社寺・和風建築を四〇物件余り設計してきました。以下、思い出される幾つかの仕事について触れさせていただきます。

「成田山・昭和の整備計画」この計画提案は社寺建築に係わることになった最初の仕事です。工事創出のため「成田山・昭和の整備計画」として成田山境内全域の整備提案したのですが、三〇年余りの間に建替図書館（提案では宝物殿）の屋上を人工地盤として八角円堂を新築、現大塔（提案では信徒会館）周辺の整備および門前広場の拡張等、逐次整備され平成二〇年開基一〇七〇年の記念事業をもって提案構想に近い形で整備が一段落しました。私どもの勝手な提案が三〇年の年月を経て実現されたことは、私にとって感慨深い仕事となりました。

「平安京羅城門の推定復元」社外PR誌・季刊大林で「平安京羅城門の推定復元」を試みる機会を得たことは古建築と、同時に建築様式の推移に興味を持つことになりました。復元の監修を後に建築学会大賞を受賞された故・福山敏男京大名譽教授にしていたくことになり、素案を携えて京都山科のお宅に伺いました。私の稚拙な一〇〇分の一立面図を見られ「同時代の唐招提寺の金堂を三日間じっくり観察してき

なさい」とのアドバイスを受けました。三日間は無理でしたが丸一日、金堂の屋根・軒周り・組み物を観察し、改めて復元図を描き直し再度先生を尋ね、「だいぶ羅城門らしくなりましたね」とおっしゃっていたいただきホットしたことを覚えています。福山先生の監修をいただいたことで一定の評価を得て、中学の歴史教科書等にも掲載され、模型は平安博物館に展示されることになりました。

その後、「光源氏・六条院館の復元」、「江戸歌舞伎市村座の復元」等、季刊大林の幾つかの復元シリーズに参加しました。市村座の復元といえば、下町の老夫婦が私どもの復元図をもとに五〇分の一模型を手作りし、「これでいいか見てください」と大きな風呂敷に包んで来られたことをほのぼのと思ひ出されます。

「海晏寺本堂・客殿」江戸名所図会に「紅葉の海晏寺」と詠われている南品川の禅寺の仕事は今でも清々しい思い出です。本堂・客殿建替えに要望された条件はただ一つ「本瓦葺きの本堂」というものでした。法規制によりRC造となりましたが、本瓦葺寄棟・扇垂木の本堂は禅宗様式を参考にしつつも現代的表現を試みたつもりです。

依頼したら全てを任せるとしてお寺さんでした。値引き分を上乗せした見積書を提出したところ、奥様が「これで結構です。此のくらい掛かると思っていました。」とのご返事。これにはやり手の営業課長が恐縮していました。また、朝夕ご住職が鐘突きの際、職人等に「ご苦労様です」と合掌され、初めは厳つかった基壇石積み職人、屋根瓦職人の顔がだんだん温和になって生き生きと作業している様はまさに寺院づくりに相応しい光景でした。

第二回賞賞の特別賞を受賞、審査員の内井昭蔵先生から「コンクリート造でありながら伝統的プロポーションの表現工夫が見られる」との評をいただき、「ご住職からは「ある老僧禅師に、久しぶりに禅寺らしいお堂を見たと言っていたのだ」とのお話しを伺い、少しはお寺さんの期待にお応えすることが出来たのではと思っています。

本堂・客殿完成から間もなく、ご住職より「引き続き、息子（当時中学生）が独立したときの住宅を作つて欲しい」と唐突に依頼されました。「住宅は使っていないと傷むし、一〇年以上も先の住まいを今建てられなくとも・・・」と申し上げましたが、「あなた様に造つてもらえればそれでいいのです。」と。設計者として未熟な私ごときにこの様な言葉をいただき、恐縮するよりも設計という職能にある種の怖さを覚えました。結局設計することになりましたが、新住宅は暫くご住職夫妻のホビールームとして利用されていました。

「毛越寺本堂と藤島先生」毛越寺は平安時代の貴重な伽藍遺構と浄土庭園を有し、無形文化財の「延年舞」、史跡遣り水の「曲水の宴」でも知られています。昭和五八年、明治期建立の老朽化著しい本堂建替えの営業設計を始めました。

初めて訪れた浄土庭園は今のよう発掘整備されておらず、かつて平安時代の苑池をイメージするに相応しい面影を漂わせていました。さらに執事長をはじめ一山僧侶皆さんの人柄に魅せられ、この本堂再建の事業に参加させていただきたい一心で計画案づくりに集中しました。そして幾度かの計画提案の後、なんと「本堂設計施工」の内示をいただくことになりました。その内示を設計本部長に報告、さぞ褒められるかと思いきや「君、うちが毛越寺本堂の設計が出来ると思っているのかい。軽々しく仕事を取つて来なさんな！」と言われ「？・・・」。今から思うと、怖いもの知らずの若気の至りとしか言いようがありません。

結局、藤島亥治郎先生の平安様式に準拠した基本設計で私どもが実施設計を担当することになりました。ご承知の通り藤島先生は東大を退官後、芝浦で日本建築史を教えられかつて私も受講生の一人でした。また平泉遺跡発掘調査の第一人者で平泉町名誉市民でもありました。当時先生は九〇歳を優に超えられていましたが、健脚・食欲旺盛、お元気そのもので学者として妥協を許さない姿勢と創作にたいする熱情に深い感銘をうけました。現寸場で長時間床に膝を付きながら舟肘木の微妙なカーブを幾度となく描き直されたお姿が目に見

かびます。

平成元年六月一日晴天のなか、本堂再建落慶法要が執り行われました。史跡内を練り歩く稚児行列、その行列を新本堂で慈しみ迎える天台宗座主・山田恵諦下(一〇二歳)、その脇に藤島先生(一〇〇歳)。毛越寺さん長年の念願が成就された日でした。

「日光山輪王寺宝物殿」近年、世界遺産に登録された日光社寺の一つ、門跡寺・日光山輪王寺の宝物殿は重文・三仏堂に面し、経文等文化財の収蔵・展示を目的とした建物で、外観は歴史的環境を配慮して和風建築としましたが、日光社寺の建築群にあって唯一起り屋根の建物です。昭和五八年、建築士会連合会よりささやかな作品賞をいただきました。

その後、輪王寺さんとは現在に至るまでお付き合いさせていただき、三仏堂周辺境内整備、紫雲閣、立木観音信徒会館等を担当しました。一お客さんから長年に渡り設計施工の仕事をしていただけることは、社内関係者一体となった誠意と努力の結果であり、ものづくりへの係り方は様々ですが、ゼネコンの設計に身を置いた者としてやり甲斐のあるチームワークだと思っています。

その他、社寺を担当したお陰で、茶室・書院等と和風建築もできたことは幸いでした。社寺は様式に倣う要素がかなりありますが、和風建築は平面計画からディテールに至るまで自由な発想でデザインを楽しめます。この楽しみがあるからこそ社寺建築を続けたとも言えます。「毛越寺延年舞の舞台」「海晏寺の書院・茶室」「目白不動の書院」「裏千家新東京道場の茶室」等、また、「サンフランシスコ日本庭園の楼門」「タイ・プミボン国王還暦記念の浮御堂」等、海外での仕事も社寺担当としての役得でした。

当初は見様見真似から始めた社寺・和風の設計ですが、お客様に恵まれ、社内諸先輩の理解を得ながら、ゼネコンでは三つやれば専門家の世界で時には図々しく三五年続けて来ました。二年前に退職、現在は今までの経験を生かして主に寺院関係のお役に立てればと思ひ、設計コンサルティングをし

ております。

### 新潟市美術館に思う 峰村一彦(一九六八卒)



それまで特筆するような公共建築が少なかった新潟市で、学生時代に憧れ勉強した前川國男氏が設計した市美術館が二五年前に開館した。隣接して新潟の原風景である掘割と柳並木を再現した公園が建設された。それと一体となり中心市街地の一画でありながら、静かな環境で美術を楽しむ雰囲気浸れる地区を形成してきた。優れた設計の地方美術館であることはもちろんだが、歴代館長・学芸員・職員や関係者の不断の努力と常設展・自主企画展・講座などの市民参加により、設計説明書や館のリーフレットにうたわれている「みる・創る・語る」ための美術館を育ててきた結果であろう。

市はこの設立時からの精神を理解しない、ただ来館者を増やすことをよしとするような館長を三年前に任命した。着任後、学芸員を館外に転出し、内部の展示物など変えた結果、今までは違う違和感を覚えるものになった。エントランスから内部に進むと豊かなポリウームの空間に迎えられるものも無くなり、殺風景な展示がある居心地の悪いロビーに変わっていった。他も貧相な表情になってしまった。

昨年七月、市主催の「水と土の芸術祭」の一会場となり、企画展示室で五トンの土と糞、米粉を混ぜ合わせ、制作した土壁の作品から大量のカビが発生した。しかし、空調設備が他の部屋とは別系統であると放置し、作品の撤収後は薫蒸や殺菌・消毒は行わなかった。さらに、今年の二月は別の展示作品から虫やくモが展示室で大量に発生した。四月に予定されていた「奈良の古寺と仏像」展は文化庁が国宝などの展示

は認めず、新潟市では中止となった。五年前に文化財管理指導官が調査し、重文などの展示が可能な工事をおこなったと聞いていたが、無駄になった。

施設がどの様に計画され設計から開館に至ったか、どの様に運営されたかを理解しないで、ただ時代が変わったと過去を否定し空間を壊していくことでよいのか。

設計事務所や市の営繕などの関係者はどの様に思っているのだろう。  
【有限会社 峰村設計室】

### 建築会 会報 赤井孝高行(一九七七卒)



建築をも含む不況の中、日々の暮らしにも苦勞する毎日、突然の電話「日々思うことを書いて欲しい」「何でも良いなら」と素直に引き受けた。

現在の不況の中には、安易な経済主義や、他人に対する無関心、人を押しよけるの功名心、育てる心の欠如が引き金になっていくようだ。短絡的に短期的に安易に安価に求められる設計の仕事、学生時代に考えていた「人を幸せに育てていく」建築は、ほとんど無い。人の生き方が多分悪い方向に向かっていくからだ。しかし、諦めるほどの分別は私にはない。あがきにあがくのだ。「人間関係を切って切って切りまくる現代の住宅は捨ててしまえ。無駄に化粧だけのビルは壊してしまえ。建て前ではなく本音のビルを作れ。」なんて若気の至りの言い方はしない。もういい加減年だから、真摯に建築に向き合っていきたい。人と人を結びつけること、環境も含めて人に穏やかに人生を生きていける建物を作っていきたいと言っても現実はいかにない。

人間そのものが本来の姿を思い出さなくては、建物が自ら

変わることはない。建物はそこに生きた人の人生が現れる。建物は人がいてはじめて建物になる。親孝行がしたくなる建物、人と楽しく暮らしていける建物、人が自然と集まってくる建物、不幸せになる人を励ます建物―笑顔があふれるのであれば苦労とか面倒くさいとか辛いとか言わない人が住む建物が、いっぱい出来るといいのだが。まだまだ頑張りが足りないようだ。みんな一生懸命やっているのだから、私ももともとと頑張り。昔よく聞かされた言葉「五十、六十は鼻たれ小僧」何を粋がつて判った振りをして分別顔をしているのか。反省して一歩一歩進んでいくことにしよう。今までにいろんな影響を与えてくれた人に、励ましてくれた人、前向きに進む力をくれた人、反面教師の人に感謝、感謝。

【株式会社サン創房】

## 近況報告 成田宏之（一九八二卒）



芝浦工大卒業と同時に郷里の青森県に入庁し二八年、周辺からは役人らしくない公務員の烙印を押されています。

地方の建築行政の本筋は、建築法規、公営住宅、官庁宮繕あたりとなるのですが、若い頃は、家庭を顧みず休日せつせとまちづくりワークショップに出かけ、少し落ち着いたかと思えば、どこの自治体も手掛けていない環境調和建築の指針づくりに熱中し、最近、公共施設のファシリティマネジメントの導入について地方から発信してきました。

本筋を他に任せる興味本位の不良公務員ではありませんが、幸いにも、FMの取り組みについて日本ファシリティマネジメント大賞最優秀賞をいただいていたから、一目置かれる不良となりました。

建築学科在籍の学生とは名ばかりで、お城の研究会、学察実行委員会、卒業アルバム復活制作の課外活動に勤しんでいた大学生生活を振り返ると、こんな風体になったのは自然の成り行きと妙に納得もしており、それにも増して不良学生を送り出してくれた三井所先生を始め大学の懐の大きさに今更ながら感謝しています。

この四月から建築行政部門に戻り住生活基本計画などを担当しておりますが、ファシリティマネジメントの理論と手法を住宅分野に取り入れたいと懲りずに考えております。さて、地方にいても芝浦工大教授を始め建築会の皆様のご活躍は、全国各地での講演や建築専門誌などを通じて聞えてきておりますし、田町、大宮の変貌、豊洲移転の芝浦工大の躍進ぶりについても校友会青森県支部総会に毎年ご出席いただいている教授や理事からうかがっており、たいへん誇らしく思っております。

最後に、建築会の皆様のますますのご活躍をお祈りしますとともに、この機会をあたえていただいた鈴木会長に感謝いたします。ありがとうございました。【青森県庁】

※ご興味のある方はご覧ください  
「青森県のファシリティマネジメント」  
<http://www.pref.aomori.lg.jp/kensei/zaisan/facility-main.html>

## 「どこへ向かっているのか」 樋口毅（一九八七卒）



卒業以来二〇数年、母校とは全く縁遠くなくなってしまった私に「建築会会報」の原稿依頼が舞い込んできました。建築会会長の鈴木泉さんの陰謀か・・・。

それはさておき、近況報告とのことですが、学生時代は石川先生にお世話になり、一九八七年に卒業。卒業後、宇部興産の住宅事業に配属になり、しばらくは住宅設計をしていましたが、その後タイトルの「どこへ向かっているのか」のサラリーマン人生になりました。手始めに沖縄県にある琉球セメントに向かい、住宅設計もしていましたが、営業から現場管理、はたまた不動産売買までを営業としていました。その後、宇部三菱セメント研究所にて材料研究、宇部興産に復職し大阪支店にて建材販売、そして現在、東京にて建材営業をしております。

就職先は一社ですが、宇部興産↓ウベハウス↓琉球セメント↓宇部三菱セメント研究所↓宇部興産、職種は住宅設計↓住宅営業所長↓不動産業↓建材材料研究↓建材営業、勤務地にいたっては、東京↓横浜↓名古屋↓埼玉↓千葉↓沖縄↓山口↓大阪↓東京で、北上？は避けたいと思っております。

ここ数年はおちついて東京にいます。母校出身者のご活躍を耳にしたり、ご一緒もさせていただいたりしております。特殊杭工法の協会に参加したら、協会内に芝工大OBが判っているだけで、一九九三年建築卒のFさん、一九九四年建築卒のSさんとYさん、一九九〇年建工卒のFさん、私を含めると五名もいました。

皆様のご活躍を目の当たりにし、私も「どこへ向かっているのか」の人生を早く脱却しなくてはならないと、日々を過しております。【宇部興産 株式会社】

## 「建築をめざして」 羽場太郎（一九九二卒）



一九八八年「建築家になりたい！」と夢をもって入学。学



部の四年間はどうしてもやりたかったラグビー部に入部し、楕円形のボールをただひたすら追いかけていました。卒業時、建築の勉強が足りなかったのに気がつき、そのまま大学院に入學。しかし時すでに遅く、何が建築なのか分からないまま就活に突入。バブルが弾け、実力も無かった事もあり、希望していたゼネコン設計部には入れず、「運動部出身のキミなら！」と言われ、清水建設に現場監督として拾ってもらい、社会人となりました。当時、担当教授の嶺岸先生に、「設計をやりたいのに、なぜ君は現場監督になるの？」と言われた事を覚えています。正直、僕もその理由は正確にわからず、全ては流れと出会いと直感でした。

東北支店勤務を命じられ、仙台で再開発のオフィスビル、相馬で中学校、郡山で再開発の百貨店、東京へ帰って来てマンションの現場管理を経験しました。ある時は、夜明け前に大型トレーラーで搬入された重量鉄骨を、夜明けと同時にワークレインでの揚重に立会いました。朝六時から夜中の二時まで、基礎梁のコンクリートを永遠と打ち続けた事もあります。職人の作業に不満を覚え、バイブレーターを取り上げ自ら作業をした事も。鳶の親方と工事用エレベーターの取り合いでケンカになり、殴られたので殴り返したら子分に止められた事もありました。再開発では、来る日も来る日も既存建物のコンクリートの躯体を重機で壊し続けるさまを目の当りにしました。その時の音や空気や埃の臭いは、今も体に焼き付いています。学生時代に体験することのなかった、建物を壊す、そして土を掘り、基礎をつくり、様々な職種の人間の手で、現物の建築を建ち上げる瞬間を見て体験したことは、僕にとつて建築との出会いであり、建築の発見でした。

一方、建築を設計したい！という強い思いはあきらめられず、毎年人事部に、設計部への移動希望を出し続けていました。しかしながら、その思いは叶わず、現場も会社も愛していたのですが、自分の夢を達成させるべく一度目の退職を決めました。

そのキツカケは、独学の住宅作家との採用面接です。「君

の人生を変える責任は取れないので、今あなたを採用はできないが、自分の力で会社を辞めて、失業手当で世界を旅して、良い建築を見て体験して来たら良い！帰って来て、それでも住宅がやりたい！と思ったら、僕のところで働きたいと思ったら、僕の事務所に来れば良い！」とアドバイスをもらいました。

三一歳、貯金と失業手当を使い、アメリカ・ヨーロッパ・アフリカを一年かけて旅しました。カーン・ミース・ライト・コルビジエ・リートフェルト・アアルト・アスブルンドなどの近代建築から、スペインやギリシャ・エーゲ海の島々の白い集落や洞窟住居、トルコ・サフランボルの木造民家、モロッコ・ベルベル人の住宅まで、自分で足を運び、自分の目で見て体験して来ました。

帰国後、退職のキツカケになった建築家に一度会おうと連絡を取ったのですが、電話にも出てもうえませんでした。また、やさしいイラストの〇〇巡礼と言う本を書いた住宅作家に電話をして、「弟子にして下さい！」と言ったら、「うちには相撲部屋じゃない！設計事務所だ！そんなヤツは建築をやる資格はない！やめちまえ！」とまで言われてしまいました。かなりへこみました。が、建築家の弟子に自分は向いていない事を悟り、芝浦の同期を頼り、彼の父親が所長をしている中規模の組織事務所・三輪設計事務所に、鳴り物入りで入所させてもらいました。同時期に、一年前、アアルトを見に行くために行ったフィンランド・ヘルシンキで偶然出会った、カメラマンの友人の実家（松戸・共同住宅）の建て替えの相談を受けました。いつ建て替えるかは未定だという事だったので、二〜三ヶ月に一度のペースで打合せを行いました。三年間が過ぎた頃、建て替えを実行する事になり、「専任で任務を遂行して欲しい！」という施主の御両親の強い願いと、ヘルシンキでお互いに夢を語り合ったカメラマンの友人の「建築家になりたいと言っていたから、あなたに依頼したんだ！」という一言で、二度目の退職を決断、清水の舞台から飛び降りる覚悟で独立、二〇〇五年五月五日、TALLO一級建

築士事務所を設立しました。

松戸の集合住宅を、現場に張り付きながら一年かけて完成させました。コンクリート打設時には必ず、僕も作業服でヘルメットを被り、竹棒や叩き棒を持って、打設に参加しました。型枠を解体したときに初めて現れる、躯体だけの力強い初原的な空間に、感動を覚えました。現場監督と企画設計しか経験のない僕が、生まれて初めて建築を設計して、監理して、建物をつくりあげる体験をさせてもらいました。

賃貸部分も全て借り手につき、施主に喜んでもらったのですが、次の仕事が全くありませんでした。半年間、遊んでいたのですが、だったら旅行しながら施主を探した方が良いと思ひ、フランスのロマネスク建築を巡礼する旅を一ヶ月間行いました。修道院など人里離れたところばかりを巡礼したので、今回は施主には巡り合えませんでした。帰国するとすぐに荻窪の共同住宅の依頼が舞い込みました。建設会社の設計・施工で決まっていたプロジェクトだったので、施主に不幸があり一年間延期していたところに、僕の一作目、松戸の集合住宅の写真を見もらう機会を頂き、気に入ってもらえたので逆転？で受注となり、同じく一年間かけて完成させました。設計前にロマネスク建築ばかりを見たからなのか、偶然にも夕方に青い光がグラデーショナルとなって現れる教会のような空間が現れました。

続いて友人の妹夫婦より、熊本で平屋の住宅設計の依頼を受けました。工事着工まで無事にたどり着いたのですが、工事を仕切っていた施主の父親とモメて、監理に行く事ができなくなり、初めて完成を見ることのない建物を設計するという、ほろ苦い経験を味わいました。

また一年間、これといった仕事がありませんでした。ところが、昨年末に幡ヶ谷の小さな和食店の内装設計を依頼され、突貫？二ヶ月間で完成させました。これは設計だけでなく、ゼネコンのように全てのコスト・スケジュールコントロールまでを行いました。終わったとたんに、今度は自由が丘のフランス料理店の内装設計を依頼され、これも二ヶ月間で完成

させ、時より友人達とワイン会をしています。

現在は、今年の春より相談を受けていた地元・吉祥寺の住宅の契約を取り、設計中です。また、三年前から相談を受け、設計変更を繰り返し、打ち合わせを重ねてきた、地元の同級生の家の契約を締結する事ができました。さらに最近、以前に軽井沢の別荘の監理だけをやらせて頂いたのですが、その増築と外装のやり変えの依頼を受けました。

これからどんな人との出会いがあり、どんな仕事ができるのか？また、仕事の依頼が続くのか？建築をつくり続ける事ができるのか？保障はどこにもありませんが、教えて下さった先生方、先輩、同期、後輩の皆様、僕は相変わらず元気です！

学部の卒業式の謝恩会で、卒業設計を指導して下さった衣袋先生（現システム工学科）に、お前はラグーマンなんだから「ラグビーみたいな建築をめざせ！」と言われ、困ってしまいました。ただ最近、気がついた事があります。設計したら終わりではなくて、現場で職人さんが作業する直前まで、これで良いのか？と自問自答しながら、場合によっては設計変更する勇気を持って、状況判断を繰り返しながら建築をつくりあげていく僕のスタイルは、まさにラグビーのスタンドオフというポジションでゲーム状況に応じて、キックかパスか、又はボールを持って走るかを判断しながらプレーした、学生時代と全く同じスタイルではないかと。

【TALLO 一級建築士事務所】

## 近代化と伝統の狭間で 浅野孝信（一九九七年卒）



振り返れば実に多くの国を旅してきました。建築の世界は

建物を見てなんぼ、という先達の言に学び、在学中より自己の研鑽と称して妄信的に海外の建築を行脚し、いつしかその訪問国も七〇ヶ国を超えていました。しかし巡礼を重ねるうちに足跡は建築から遺跡、そして自然へと移り、圧倒的な存在感で鎮座する大自然には畏怖の念すら抱きました。建築の設計という職を持つ身として文化の一端を担う事が、いかに狭い範囲の活動であるかを実感し、また職能として正道であるかを自問することも多々ありました。

そして昨年の一〇月、運命の出会いとも言える一国へと赴いたのです。様々な国を巡ったことで、新たな文化に触れる際には先入観を捨てることを自然と身に付けられたと自負していましたが、そこでの独自の文化、宗教観、そして人々の生活との邂逅は、それまでの旅の概念を覆すには十分でした。ブータン王国。ヒマラヤの麓に位置する、標高五百メートルから七〇〇メートルという起伏に富んだ、日本の九州ほどの小国。伝統文化を重んじ、未だ観光地として多くの人を受け入れない半鎖国状態、テレビ放送も今から一〇年ほど前によくやく始まった、そんな秘境中の秘境です。民族衣装の着用を義務付けられ、決して物質的な豊かさを求めず、精神的な豊かさで幸福度を量る国民。世界で唯一チベット仏教を国の宗教とし、その流れを汲む寺院や伝統住居の佇まいと、豊かな自然、そして穏やかな人々の生活が見事なまでに調和し、建築と自然と人間とはこう対峙すべきだと再認識しました。

しかし、さすがに何の問題も無く「幸せのうちに暮らす理想郷」と言う訳にはいかないようで、特に首都を代表する都会では、と言ってもせいぜい三、四階建ての建物しかないのですが、近代化と伝統の危ういバランスの渦中にあり（例えばアマンリゾートなどの外資系企業も近年入ってきている）、感銘と共にその文化継承の難しさを体感しての帰国でした。

タイミング良く、帰国して間もなく国際協力機構のJICAでブータンから建築設計の仕事の要請があることを知って応募し、来年一月より首都ティンブーの文化省に入省して働くことになりました。文化財保護部という部署に建築士とし

て配属され、日本で言う国宝などの伝統建築物の調査、保存増築を主な任務として、二年間派遣される予定です。

今まで鉄骨やRC造の設計をメインに活動してきた私にとって甚だ畑違いの分野への挑戦。もちろん日本の建築事情とブータンのそれとは大きな乖離があり、聞けば、未だ文化財保存に関する体系が確立されていないとのこと。そこに一外国人として国際協力をする意味をどこに見出すのか、それが当面の課題であり、探求しがいのある仕事となりそうです。多くの見聞と共に経験を積み、願わくは任国での活動の様子をまたどこかで報告できればと思っています。

【プロトスタイル株式会社】

## 三〇歳をむかえて 岩崎康明（二〇〇二年卒）



野球選手のイチローが一流になった理由は、類稀な才能と弛まぬ努力の上に「宣言」があったから。最近目にしたある文面にこう記されていました。イチローの才能は、周知の事実ですが、その才能の裏に二〇〇%の実力を発揮する為に、二〇〇%の準備をする努力があるそうです。更にその努力の前に、既に小学生卒業の頃に「宣言」をしていたそうです。

「僕の夢は、一流のプロ野球選手になることです。その為には、中学や高校で全国大会に出て活躍しなければいけません。活躍するには、練習が必要です。三年生の時から今まで、三五日中三六〇日は厳しい練習をやっています。こんなに練習しているのだから、必ずプロ野球選手になれると思います。球団は、中日ドラゴンズか西武ライオンズが夢です。ドラフト球団で契約金は一億円以上が目標です。」

大学院を修了し、社会に出て七年目。現在の私の仕事は、

主に商業建築や公共建築で顔となる部分。ファサードの詳細設計、素材調達、製造管理、現場施工までを一貫して行う外装専門の仕事です。より具体的には、ファサード部分のディテール検討・使用部材の強度検討・素材開発及び調達・製造管理・コストコントロール等の多岐にわたる領域を他の専門技術者と協同しながら統合（コーディネート）していく「ファサードエンジニアリング」という職務です。この仕事の醍醐味は、建築の意匠的な部分について机上で考えるだけでなく、実際の素材を使って、実物大のスケールでものを造りながら考えることができる点です。日々の業務は、デザイナーや設計者との打ち合わせに始まり、製造管理や材料調達の為に国内の工場や海外の工場への出張、納まりを確認する為の現場管理まで行う内容です。そんなめまぐるしい日々を送りながら、ふと気がつくと私は、今年の二月で満三〇歳を向かえていました。

世界のイチローと比較するのはおこがましいですが、いままでの自分を振り返ってみると、イチローのような明確な「宣言」がなかったように思います。これまでは、どちらかというところ「宣言」を先送りにし、単に建築やものづくりに対する強い関心と好奇心を原動力にして、とにかく色々なものを吸収して自分の中に「経験」と「知識」を蓄積することで満足していたように思います。行き当たりばつたりの海外建築旅行、建築現場や製造工場での生々しいものづくり、勝手知らぬ海外での交渉事や現地人とのものづくり、有名建築家との協同作業等、それらの体験は、私にとって非常に刺激的な体験であり、その際に手助けしてくれた多くの人々の支えによって、私はスキルを高め、同時に見識の広がりももてたと実感しております。しかし、一方であまり自らの意志で物事を選択し、決定することはせずに、自分に訪れた機会（チャンス）をまずは受け入れる受身な姿勢が目立ったようにも感じております。

三〇歳という年齢をむかえ、今更ですが、これまで先送りにしてきた私の「宣言」の部分について、今一度自分と正面

から向き合って考え、今後は自らの意志をもってもっと積極的に邁進していきたいと思っております。

【旭ビルウォール株式会社】

## 建築は楽しい

野原修（二〇〇七年卒）



「設計の上手い人には食事が多い。」。学生時代、ある先生と食事を一緒にさせていただいた際、先に食事を終え、時間を持て余していた先生が、周囲の学生に向けてこのようにつぶやいた。当時は特に気に留めることもなかったが、今回、母校の会報へ原稿を書く機会を頂いた時、何故かこの言葉がふと頭に浮かんだ。

振り返ると、大学を卒業して建築の実務に関わるようになり、一年以上が過ぎた。実務を始めた当初は、大学で学んだ建築の領域と、社会で求められる建築の領域の広がりの違いに愕然とし、次々と進んでゆく周囲の動きになんとかついてゆくの精一杯であった。それでも何か自分には出来ないことをやらなければ、という焦燥感を持ち続けていたため、鉛筆とカッターだけは手放すまいと心に決めていた。今年に入り、たまたま比較的自由に絵を描く機会を頂いたため、それに夢中で取り組んできた結果、ようやくそれがひとつの形としてまとまりつつある。未だ中程なれど、その過程を省みると、膨大な日々の時間の積み重ねだけが思い起こされる。

事務所からの帰り道に、当然のように建っている建物を見ると、ふと何故建物を作るのはこんなに大変なことなのだろうと素直に疑問に思うこともあり、同時にそれを生業とする先輩方に尊敬の念を感じていた。しかし、そのことを苦しいとは思わずに、もっと少しでも多くの時間にそのことを費や

したいと思うのは、単純にそれを楽しんでいるからなのだと思います。

冒頭に挙げた先生の言葉に根拠を求めるならば、それはきっと、遊びの途中で食事の席に呼ばれた子供がそれを急ぐように、時間を惜しんで物事に夢中で取り組んだ結果なのだろうと思う。先生はよく研究室の自席でサンドイッチを食べていた。そういえば、僕も学生のときよりもサンドイッチを食べる機会が増えた気がする。やはり学生は先生に影響を受けざるを得ないのである。

【（株）日建設計】

## 本学および建築学科の近況報告

藤澤彰

（二〇一〇年度 建築学科主任）



二〇〇九年度の学位記授与式は三月一七日に大学院、学部合同の大学全体の式が東京フォーラムで行われ、その後、建築学科では会場をお台場のホテルグランパシフィックに移して、学科独自の学位記授与式、卒業記念パーティを行いました。一〇六名が晴れて卒業いたしました。学位記の授与につづいて、成績優秀者に対する各種表彰が行われました。

卒業成績最優秀者に贈られる建築会賞は、鈴木泉建築会会長より阿部誠也君に授与されました。つづいて学業成績優秀賞が六名に贈られました。卒業設計最優秀賞および三浦賞は宮地洋君に贈られ、卒業設計優秀賞が四名に贈られました。また、卒業論文優秀賞は五名に贈られました。各賞の受賞者と設計・論文のタイトルは以下の通りです。

□ 学業成績最優秀賞／総代／建築会賞

阿部誠也

□ 学業成績優秀賞

河野俊次(有元賞)／平林幸泰

五十嵐健祐／福本春奈

本多仁／渡邊修平

□ 卒業設計最優秀賞・三浦賞

宮地洋 「Hyper Market」

□ 卒業設計優秀賞

河野俊次 「無名住宅の夏」

杉本悠子 「Pool & Stream」

平野晴香 「残柱のアリア」

吉村侑也 「m.c.c.c.」

□ 卒業論文優秀賞

五十嵐健祐 「建築工事の積算に関する調査研究 早期コスト把握に向けた実例調査」

伊藤大史 「ネットカフェにおける環境タバコ煙の実態調査」

白吉雄太 「埼玉県熊谷市上新田にある諏訪神社の建築史的研究」

新堀達也 「東京大都市圏における駅周辺商業地の盛衰の実態、変遷および要因の分析」

□ 卒業論文優秀賞・浜田賞

本多仁 「常時微動測定による三次元モード推定手法の解析モデルによる検証」

四月になり、二〇一〇年度の新生一三〇名を迎い入れました。定員が一〇〇名ですから、かなり多い新生生です。どうやら本格的な「ゆとり世代」を迎えたようです。新年度最初の学科オリエンテーションに遅刻する者がかなり多く、その上、遅刻は悪いことという認識に欠けたふるまいも見られ、建築学科の新米主任は入学のお祝いを述べる前に、声を荒げて怒鳴りつけてしまいました。瞬間、暗い大学生活のスター

トになってしまったことを、悔みましたが、幸い、怒鳴り声の意味は理解してもらえたようで、その後の学習態度はおおむね良好なようです。

就職状況は不況が長引き昨年度も本年度も苦戦しています。それでも求人数全体はそこそこ確保できているのですが、学生は相変わらず意匠設計、ハウスメーカーなどを希望する者が多く、他分野、特に施工関連企業に進む者が少ない状況です。近年の新しい傾向は設備関連企業を希望する学生が多くなってきたことで、求人数も増加の傾向にあります。このような就職の需要と供給を考えると、カリキュラム面でも何らかの対応策を考える必要があるかもしれません。

大学院進学者も相変わらず多いのですが、建築学科の特徴として、優秀な学生が他大学の大学院、そのほとんどが国立の大学院に進学することがあげられます。二〇一〇年春は一〇六名の卒業生中四三名が進学し、そのうち二三名が他大学の大学院に進学しました。難関大学院に合格するということは、学部教育の成果のひとつかもしれませんが、我々としては手放して喜ぶわけには行かない問題です。しかし、二〇一一年度入学の大学院生から学内の奨学金の制度が変わり、建築学科の成績上位者がかなりの数、本学大学院を志望してくれています。この傾向が数年続けば、大学院のレベルが上がるのではないかと期待しています。

ところで、豊洲の新キャンパスに移って丸四年が経過し、学部学生はもちろん、院生をふくめてもほぼ全員が昔の田町校舎を知らない学生になってしまいました。芝浦の建築学科の卒業生が社会人として活躍し、一定の評価をうけてきたのは、あの混沌とした狭くて使いにくい田町校舎の存在と関係があるのではないかと、確かな根拠もなく思っています。きたなくて、狭くて、使いにくい空間は、必然的に使う人間が頭を使い、工夫をこらさないとやっていけないもので、建築学の教育としてはまさに生きた教材でした。田町校舎ではどこにしようと隣の気配を感じ、どこに移動しようとしても誰かに会ってしまい、会いたくない教師にばったり会って、

「最近どうしているんだ」と呼び止められてしまうような空間でした。教員同士も顔を合わせずにはすまない、文字通り肌のふれあう空間でした。「潜水艦」にたとえた設計の先生もいました。

豊洲校舎はきれいで広いスペースが与えられ、快適ではあります。田町校舎が持っていた混沌さは無くなっていますが、建築学科は主に七階と八階のフロアを使っていますが、学生同士、教員同士、学生と教員が偶然に顔を合わせる機会はめっきり少なくなり、学校にいても何日も顔を合わせないことも珍しくありません。研究室にこもっていると、外界の気配を感じないので、建築の教育空間としては考えものだと思います。人の存在を意識して初めて存在するのが、建築空間であろうし、漫然と与えられた便利で広い空間は、使い手に、頭を使い、工夫をこらすことを要求しません。豊洲校舎の八階にある製図室を見れば一目瞭然です。そこにはあの田町校舎の古くてきたなく狭い製図室で、あたりまえに見られていた工夫、マナー、エネルギー、空間を有効に使う知恵が失われてしまいました。これは建築空間を研究の対象とするものにとっては、大きなマイナスだと思えます。

学生にもう田町の魑魅魍魎とした空間を経験させることはできませんが、幸いにも教員には田町で学び、田町で教鞭をとっていた先生方がまだ多くいます。OBの方々にも多数いらっしゃいます。ノスタルジーではなく、狭くて、きたなく老朽化した空間を使いこなすもろの知恵を伝えることがこれからは重要だと思えます。校舎は新しくきれいになったけれど、建築教育は退歩したと言われないうようにしなければなりません。これは校舎の問題だけではなく、実は、建築学科の教育全般に言えることかもしれません。

## デザインチャンピオンシップ2009

第八回を迎えたデザインチャンピオンシップが、二〇〇九



年の芝浦除期間中の一月二日に開催されました。デザイン  
 チャンピオンシップは二〇〇二年より始まった建築学科主催  
 の建築設計コンペで、建築会が後援しています。毎年、外部  
 講師をお招きして、九月に出題とご講演を、一月の学祭期  
 間中に合わせて公開審査と作品展示を行います。過去には隈  
 研吾氏、内藤廣氏、山本理顕氏他の著名建築家が出題を行い、  
 また学科、学年を問わず応募できるので、建築学科の一大イ  
 ベントとして定着しています。

昨年はアトリエ・天工人（テクト）を主宰されている山下  
 保博氏に出題いただきました。山下氏は、建築工学科出身で  
 八六年に本学大学院を修了され、「天工人（テクト）流」仕  
 事を生み出す設計事務所をつくりかた、「アトリエ・天工  
 人／素材・構法からの建築」（ともに彰国社）等、多数の著  
 書も刊行されている活躍中の建築家です。八回目にして初め  
 て本学出身の講師をお招きすることになりました。「新しい  
 環境の創出」という出題に対し、建築学科をはじめ、建築工  
 学科、環境システム学科、大学院から総勢五〇チーム一〇二  
 名の応募がありました。パネル展示の一次審査、公開プレゼ  
 ンテーションの二次審査を行い、建築学科の三年生チームの  
 作品「はじまりは落ち葉」（植田隆也＋寺田彩瑛子＋下平瑠  
 衣＋那須野馨）が最優秀賞に選ばれました。その他に優秀賞  
 二点、佳作五点が選ばれ、最優秀賞には副賞としてイサムノ  
 グチの照明彫刻「マキナ」が贈呈されました。

本年も学祭に合わせて第九回のチャンピオンシップが行わ  
 れます。この会報がお手元に届く頃には結果が出てはいるはず  
 ですので、是非建築会ウェブサイト（<http://site.arch.com/>）  
 をご参照ください。

□デザインチャンピオンシップの歴史

第一回（二〇〇二）審査員：隈研吾氏

出題：「unit object」

第二回（二〇〇三）審査員：元倉真琴氏

出題：都市の隙間？あなたが都市を変える



第三回（二〇〇四）審査員：内藤廣氏

出題：動く構造体

第四回（二〇〇五）審査員：山本理顕氏

出題：都市ミュージアム

第五回（二〇〇六）審査員：小島一浩氏

出題：新校舍に「FLA」をインプリントせよ

第六回（二〇〇七）審査員：古谷誠章氏

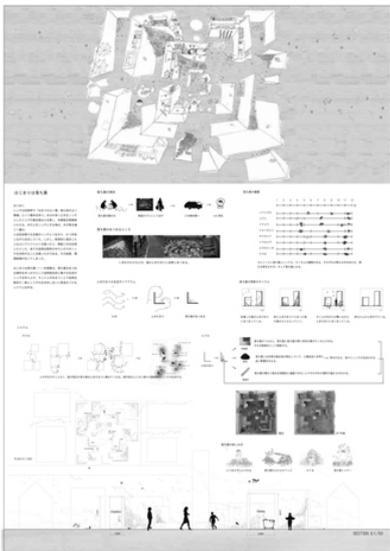
出題：ハイバースクール／学校を超えた学校

第七回（二〇〇八）審査員：北山恒氏

出題：未来の集合体



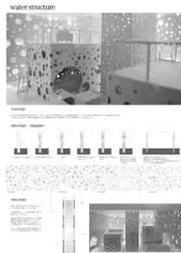
山下先生



最優秀案



会場風景



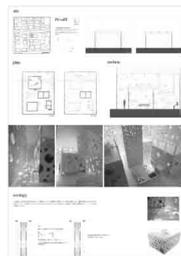
優秀案



優秀案



会場風景



優秀案



講演会ポスター

建築学科特別講演会報告

一昨年までに二―三回を数えた建築学科卒業生による「特別  
 講演会」ですが、昨年は「就職セミナー」とタイトルを変え、  
 一月九日に卒業生五名を講演者にお迎えして開催致しまし  
 た。昨今の就職事情も重い重ななつてか、建築学科の三年生を  
 中心に約一五〇名もの学生が参加し、建築の各分野で活躍し  
 ている先輩方のお話しに、神妙な面持ちで耳を傾けていまし  
 た。講演終了後は学生が個人的に先輩方に話を訊く姿が見  
 られるなど、卒業生と現役学生の交流の場にもなりました。  
 講演者とお話しの概略をまとめました。

2010年度 会計報告 (2010.7.31現在)

収入	繰越金	普通貯金	3,094,593
		普通貯金(会費振込用)	582,350
		現金	0
		小計	3,676,943
	会費	年会費振込み	998,200
広告料	会報広告収入	140,000	
雑収入	建友会名簿分担金	552,377	
	郵便貯金利子	440	
	小計	1,691,017	
計			5,367,960 円

支出	会報第24号印刷費・送料	654,756
	事務局封筒印刷	55,125
	会員名簿作成費	1,598,827
	会員名簿発送費	172,080
	デザインチャンピオンシップ賞品・諸掛	47,565
	卒業優秀成績賞 他	62,580
	ホームページ維持費	117,180
	事務費	通信費 6,038
		振込手数料 3,045
		事務用品費 11,890
	計	2,729,086 円

次期繰越	普通貯金	914,018
	普通貯金(会費振込用)	1,722,550
	現金	2,306
計	2,638,874 円	

支出+次期繰越金	5,367,960 円
----------	-------------



□構造設計分野から  
大成建設株式会社  
西尾博人・一九九四卒  
構造設計者の役割、構造設計業務とその流れ等構造設計全般の業務を概説頂くとともに、学生にとっては分かりにくい基本設計、実施設計、現場監理の違いを丁寧に解説頂きました。

□建築施工分野から  
大成建設株式会社  
上田大裕・二〇〇五卒  
「私の一日の仕事」と題して、日々の工事現場で巻き起こる施工管理の業務の数々を臨場感溢れた語り口で、分かりやすく説明頂きました。担当された伊東豊雄設計の劇場「座・高円寺劇場」での現場体験などについてもお話し頂きました。

□都市計画分野から  
株式会社日建設プロジェクト開発部門都市デザイン室  
西海哲哉・一九九一卒

曾根幸一・環境設計研究所と日建設で都市・建築の設計・計画に携わった経験から、実務者の心がけとして、体力・アピール力・実現化力・スケール力の大切さを強調されていきました。

□設備設計分野から  
鹿島建設株式会社  
鈴木智彰・二〇〇五卒  
建築業界におけるゼネコンの位置づけ、衛生設備や空調設備、電気設備などの違いなどを解説頂くと共に、ご自身が学生であった頃、どんなことを考えながら就職活動をしたかなど実直に語って頂きました。

□行政分野から  
野島毅・一九九三卒  
東京都 都市整備局都市づくり政策部 土地利用計画課  
基本計画係  
ハウスメーカー、ログハウスメーカー、東京都と様々な職を経験してきた立場から、それぞれの特色を解説頂き、最後は後輩へのメッセージとして学生時代になすべきことについて触れられました。

二〇一一年度会費納入のお願い

二〇一〇年度決算は上記の通りです。ここ数年、会費納入率は徐々に改善されておりますが、まだまだ低調ですので、是非、皆様のご協力をお願い致します。同封の郵便振替用紙で年間費二〇〇〇円をご送金ください。会員番号が封筒のタックシールに記載されておりますので、郵便振替用紙の会員番号欄にご記入ください。住所や勤務先などに変更があった方は通信欄にその旨を記載して下さい。名簿のデータを更新します。

また、本年は、建築会名簿(建築工学科のOB会である建友会との合同発行)の発行年であり、今回発行する名簿は建築会年会費をお支払い頂いている方に送付するほか、二〇一一年度分の会費を納入された方には、来年七月末日頃発送することと致しますので、会員各位におかれましては、是非とも会費納入していただけますよう、よろしくお願い致します。なお、名簿への不掲載を希望される方は会費振り込み用紙の通信欄にその旨をご記入下さい。

ついて触れられました。



上田大裕氏



西尾博人氏



鈴木智彰氏



西海哲哉氏



会場風景



野島毅氏



## 編集後記

新体制での会報誌第二号はいかがだったでしょうか。原稿依頼をさせて頂く際は「近況報告を八〇〇字程度で、」とお願ひします。しかし、世代に関わらず、卒業後、積もり積もった思いの丈は、原稿用紙二枚程度では到底おさまらず、多くの方が溢れる思いを熱く綴って下さいます。編集方針としては、よほどのことが無い限り、文章の削除や訂正はおこなわず、誤字脱字の範囲にとどめるようにし、できるだけ生のままの原稿の雰囲気をお伝えできるようにしています。様々な熱い思いは伝わりましたでしょうか。

今回も、お忙しい中、原稿を快諾下さった卒業生の皆様、先生方、関係者の皆様に心より御礼を申し上げます。また、この経済不況の中、貴重な広告を下さった皆様には、建築会活動へのご理解に対して改めて御礼を申し上げます。

道田淳（一九九三卒）

## 第一回 建築学科同窓会のお知らせ

建築会では、会員相互の親睦をさらに深めるため、本年より毎年年末に建築学科卒業生の集いの場として、建築学科同窓会を開催することとしました。

以下の要領で開催いたしますので、会員の皆様お誘い合わせの上、多数ご出席いただきたくご案内申し上げます。

## 記

□日時 平成二十二年二月四日(土)

受付 午後二：三〇～

講演会 午後三：〇〇～四：〇〇

懇親会 午後四：三〇～六：三〇

## □会場

芝浦工業大学 豊洲校舎

東京都江東区豊洲三、一、三三五

東京メトロ有楽町線「豊洲」駅 徒歩二〇分

■受付 交流棟六階 大講義室前ロビー

■記念イベント 交流棟六階 大講義室

第一部 基調講演・芝浦工業大学の明日

芝浦工業大学理事長 五十嵐久也氏

(建築学科一九六四年卒)

第二部 イベント・東京スカイツリー 設計余話

スカイツリーを題材に、

近代タワー建築を考える

■懇親会 交流棟三階 カフェテリア

□会費 三〇〇〇円(当日受付にてお支払いください)

## □連絡先

■学内事務局

芝浦工業大学工学部建築学科

〒一三五・八五四八

東京都江東区豊洲三、七、五

T E L : 〇三・五八五九・八四〇〇(学科事務室)

■学外事務局

有限会社K A プランナー内

芝浦工業大学建築会事務局

〒一四・〇〇一四

東京都北区田端一、二〇、二五 染合ビル三F

E・M A I L : sit\_arch@yahoo.co.jp

※出席連絡ハガキは一月一五日までにお出しく下さい。

尚出席の連絡は建築会ホームページ (<http://sit-arch.com>)でも受け付けております。

## 個人情報の取り扱いについて

二〇〇五年四月一日より「個人情報の保護に関する法律」が施行されました。本建築会におきましても会員の個人情報(氏名、自宅住所、郵便番号、電話番号、勤務先名、勤務先電話番号等)につきましては、芝浦工業大学建築会会則第八条により厳重に管理しております。

第八条(個人情報の取り扱い)

- (一) 建築会の個人情報は以下の目的に使用する。
- 一、芝浦工業大学建築会「名簿」の作成資料
- 二、建築会会報の送付
- 三、建築会関連の案内
- 四、芝浦工業大学からの案内、連絡事項など
- 五、会員による同期会等の連絡
- (二) 会員から提供された個人情報は上記利用目的の範囲を超えて利用しない。又収集した個人情報の利用 提供には厳正な管理の元「本人の同意がある場合」又は「法令等で要求された場合」を除き、第三者に開示、提供しない。
- (三) 名簿作成に当たり氏名以外の個人情報(住所・電話番号・勤務先)削除の要求がある場合はその趣旨申し出により名簿から削除する。
- (四) 会員個人情報の管理は建築会事務局が一括して行う。

お問い合わせ 学校法人芝浦工業大学建築学科内建築会担当

〒一三五八五四八

東京都江東区豊洲二七五

F A X : 〇三五八五九八四〇一

E・M A I L : edahiro@shibaura-it.ac.jp

建築会ウェブサイト

<http://sit-arch.com/>